

にはこの黒子の地にのみ與へられて居るのであらうかと疑はれる。

太陽は西に没した。暗い暗い夜の幕は刻一刻、此山里を襲ふ。嗚呼夜が來た。さびしい夜が來た悵然たる折しも久遠の梵鐘は一聲。この山里を震はした。

——(身延ホテルの丘上にて)——



我が書齋

二 宮 龍 巖

與へられた室の一隅は私の書齋だ。單調と無味を柔げる爲に机上に小さな一つの花瓶に一輪の秋菊の花を挿して、それで私は充分に此の書齋を愛する事が出来る。悲しい時にも嬉しい時にも私はこの机の前にごつかと坐る、と挿した秋菊が私の眞の友になつて慰めて呉れる。二三日前に室の入口に『來者不拒之去者不追之』と書いた紙片を貼りつけて見た。この書齋が『私のものだ』こう思ふとき室に對する強い愛著が起つてくる。(大正一二、一〇、九稿)



凝 視

今 泉 智 旭

みるまゝにやまかせあらくしぐるめり都も今は夜さむなるらむ。